

2025年3月23日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教30「無限の豊かさ」

詩編23：1～6、ヨハネ6：1～15

イエスさまはフィリポに「どこでパンを買えばよいだろうか」と問われます。しかも「こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである」とあります。イエスさまはこの後、御自分でパンを増やす奇跡を行われることをご存知の上で、あえてフィリポを試して「どこでパンを買えばよいか」とお聞きになられたということです。「試みる」と訳された言葉は、英語ではテストと訳されます。フィリポをテストしている。イエスさまにはフィリポに期待した答えがあったのです。

フィリポの答えはこうでした。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」そこに集まった群衆は男の数だけでも五千人います。女性、子どもも入れたらその数倍にはなるでしょう。そのおびただしい群衆を見て、フィリポは即座に計算しました。すぐに二百デナリオンと試算します。一デナリオンが当時の日当と言われていますから二百日分の稼ぎです。でもそれでも足りない。フィリポが出した結論はそうでした。ただ、そもそもこの時、弟子たちが二百デナリオンもの大金を持っていたのかもわかりませんし、たとえ持っていたとしてもそれだけのパンを調達するのは現実的ではありません。

弟子のアンデレは、おそらく食べ物を持っている人を探したのでしょうか。するとパン五つと魚を二匹持っている少年がいたので連れて来た。でもたったこれだけのパンと魚では何の役にも立たない。焼け石に水だ。これもフィリポと同じ結論と言ってもよいでしょう。何れにしても、自分たちでは全く手に負えない。つまりここで弟子たちが出した結論はそういうものでした。それはイエスさまが求めていた答えでしょうか。

もう一度、イエスさまの質問を注意して見ましょう。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」(5節)「どこで」(ポーセン)は、「どこから」ということです。どこからそのパンは来るのか。弟子たちは、自分たちで何とかパンを調達しようと思いました。その結果、フィリポは少なくとも二百デナリオンが必要と言い出し、アンデレは手持ちのパンを見て途方に暮れます。そこには人間の限界、無力さが示されています。それは人間の救いということに置き換えてもいいでしょう。救いはどこから来るのか。わたしたちは自分たちの中に救いを可能とするものがあると考えて計算したり、掻き集めたりしているのかもしれませんが。でも人間の中には限界がある。手持ちのものはわずかですし、限られているのです。では、わたしたちは何によって満たされるのか。わたしたちの持っているものはあまりに貧しく、焼け石に水なのです。それでも何とか可能性を見つけて、掻き集めて、何とかしようというのでしょうか。そのパンはどこから来るのでしょうか。

この「どこから」という問いかけで思い起こすのは、ガリラヤのカナでイエスさまが婚礼に招かれ、水をぶどう酒に変えられた奇跡の話です。「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった」(2：9)このぶどう酒がどこから来たのか。「どこから」ここでも同じ言葉が使われています。イエスさまが味気ないただの水を最高のぶどう酒に変えられた。ぶどう酒はイエスさまから来たのです。そして「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを

信じた」(2:11)とあります。弟子たちはその奇跡を目の当たりにしました。もちろんフィリポもアンデレもそこにいたのです。そしてイエスさまを信じました。どこから救いはくるのか、イエスさまから来ることを弟子たちは体験した。ところが、いざテストをしてみると、見当違いの答えが返ってきた。イエスさまに期待するのではなく、救いが自分たちの中にあると考えて、必死にそれを探そうとしているのです。それで限界を感じ、途方に暮れるのです。

わたしたちは、すぐ現実、足元を見ては、一喜一憂しているところがあります。計算をしながら、これでは足りない。これでは何の役にも立たないと嘆く。確かに、下ばかり見て、この世の現実だけを見ていたら、貧しく、無力であり、行き詰まりしかないでしょう。世の中に目を向ければ戦争に苦しむ人々がいます。物価高も深刻です。昨日も保育園の卒園式があったのですが、この子どもたちが生きていくこれからの時代はどんな時代なのか。どんな世界になっていくのか。とても心配になります。確かに、この世界も、わたしたちの暮らしも、これだけを見ていたら希望はないと言わなければなりません。でもだからこそイエスさまは信仰を求めておられます。詩編の御言葉に「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る、天地を造られた主のもとから」(詩編121:1~2)そのことを教えられたためにイエスさまは天から来られ、御自身を命のパンとしてわたしたちに分け与えてくださいました。そこにわたしたちの本当の養い、豊かさがあることを教えてくださるために、イエスさまはこの奇跡を行われました。

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、座っている人々に分け与えられた」(11節)という部分は、最後の晩餐の場面を思い起こさせます。ちなみに4節に「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」とあります。最後の晩餐は過越の食事でした。過越の食事というのは、出エジプト記第12章にその記述があります。神さまがイスラエルの人々をエジプトから救い出されたのですが、その時にイスラエルの人々は犠牲の小羊を屠って、その血を家の門に塗り、その小羊を食べました。するとその家を災いが過ぎていったのです。その出来事を記念する食事が過越の食事です。イエスさまは、まさに過越の犠牲の小羊として十字架でその命を献げられました。それによって、わたしたちは罪赦され、神さまの子とされます。そのイエスさまにこそわたしたちの救い、養いがあるのです。

わたしたちは無力ですし、何もありません。どんなに掻き集めても、満たすことはできない。けれどもだからこそ、イエスさまが命を捧げて、わたしたちにすべてを注いでくださいました。それがこの奇跡が表していることです。わたしの中には何もない。だからイエスさまが与えてくださる。わたしたちがイエスさまに結ばれて、わたしの中にイエスさまをお迎えする時に、わたしたちはその豊かさに生きることができるのです。ペトロの手紙に「あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました」

(Iペトロ1:4)とあります。この天の資産こそ、イエスさまが十字架で注ぎ尽くしてくださった永遠の御国を生きる命です。そこにわたしたちが求めるべき真の豊かさがあります。これを知っているのと知らないのでは生き方は大きく変わるでしょう。

天の父よ。自分たちの中に生きるパンがあると考えてそれを掻き集めています。でもそこには何もありません。わたしたちが求めるべきは、天からのパンです。イエスさまの命です。そこにわたしたちの生きる力があること、無限の豊かさがあることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。